

マタイによる福音書5章8節 「心の清い者」

1A 八福の中にある命令

1B 義に飢え渴いた者

2B 悲しむ者

2A 心の清さ

1B 外側の行為

2B 心の邪悪さ

3A 心の清さの幸い

1B 新しい契約の働き

2B 「清め」

1C 二心からの清め

2C 汚れからの清め

3C イエスに似た者

4A 神を見る

1B 神を見ることのない人間

2B 神を知る恵みにあずかった信者たち

3B 将来の希望

本文

マタイによる福音書5章を開いてください、私たちは山上の垂訓のシリーズを学んでいます。今日は、八福のうち五つ目の幸いの学びです、「**心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです。**」

1A 八福の中にある命令

1B 義に飢え渴いた者

私たちは、八福について学んでいて、天の御国に入る人、その中で生きる人の姿を見て行っています。言い換えれば、キリスト者として、キリストの弟子としての姿です。それは絶対に自分には正しさが無い、圧倒的に自分は駄目だという絶望感から始まることを、初めの三つの幸いからみえました。「心の貧しい者は幸いです」「悲しむ者は幸いです」そして「柔和な者は幸いです」ということです。

そしてイエス様は、自分自身にある欠けに注目させてから、今度は、神ご自身の義また神の国の義を求める姿へと話しを変えています。「**義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。**」自分に正しさが無い、義がないと悟ることによって、ようやく自分が信仰の立場、自分

の行いではなく、神の義に拠り頼む生活を歩むことができます。そして、すばらしい約束は「満たされるからです」ということです。主は、ご自分の御霊によって私たちに義の賜物を注いでくださいます。それが現在も、罪に打ち勝つ力として与え、また将来は、罪そのものからも自由にされて、神の義の中にいることのできる幸いにあずかります。

それから、「あわれみ深い者は幸いです」「心のきよい者は幸いです」そして、「平和をつくる者は幸いです」と続くのです。義に飢え渴く者がそのまま、憐れみ深さへと導かれ、そして憐れみを人々に示す中で、心の清さが試されます。そして、心の清さを保っている者が平和をつくる者として用いられていきます。

平和をつくる者については次回の学びに譲りますが、なぜ憐れみ深い者が、心の清い者へと移っていくのでしょうか？憐れみ深さは、自分自身も肉の弱さを身にまもっていて、過ちを犯す者に対して同情できるというところから来ます。それは罪に妥協していることでは決してありません。けれども、その罪を自分自身も犯し得ることを重々承知で、それで忍耐をもって人に接して、憐れみを示していくのです。もし自分自身の弱さを知らなければ、その人を裁いたり、上から目線で見下すことはできるかもしれないけれども、その人のことを本当の意味で思いやることができません。大祭司について、ヘブル書の著者はこう言いました。「大祭司は自分自身も弱さを身にまもっているのだから、無知で迷っている人々に優しく接することができます。(5:2)」そしてイエス様ご自身が、罪は犯されなかったものの、弱さを身にまもっていたことを述べています。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした。すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。(4:15)」このようにして、私たちの主に対する働きは、憐れみの働きといっても良いでしょう。過ちに陥っている人々を助け、柔和な心で正し、忍耐をして成長を待ち、主の前にへりくだって仕えます。

そしてその時に大切なのが、「心の清さ」です。憐れみの中で仕えていても、そこには聞き分けのない人が自分の前に現れるでしょう。そうすれば自分の忍耐が切れて、怒り散らすかもしれません。モーセが、イスラエルの民に対してそれを行ってしまいました。若い世代のイスラエルの民が古い世代と同じように不平を鳴らしていたので、それで怒って、岩を二度打ってしまいました。聞き訳がない人に対しても、それでもキリストからの助け、御霊の助けを受けて、主から命じられたことを忠実にこなしていく必要があります。憐れみの業を行っていく時に、私たちが心を見張って、それを清く保ち、それによって罪によって壊れていた関係が修復されていき、それで次の幸い、平和を造る者へとつながっていくのです。

2B 悲しむ者

ロイド・ジョンズは、義に飢え渴く者の幸いの後に続く、この三つの幸いは、その前の三つの幸いに対応するものだと言っています。そうかもしれません。つまり、「あわれみ深い者は幸いです」と

いうのは、「心の貧しい者は幸いです」に対応していると言います。確かに、自分自身が神に出会って、自分はもうだめだと悟った者にこそ、憐れみの行いを他者にすることができます。そして、「心のきよい者は幸いです」は「悲しむ者は幸いです」に対応していると言います。これも、その通りです。悲しむとは、自分の内にある罪に対して悲しみます。そうした、罪全般に対して深い悲しみを覚えているからこそ、心の清さを求めます。罪に悲しみを覚えていなければ、心に汚れが入って来ても、そのまま放っておいていいと考えるでしょう。そして、「平和をつくる者は幸いです」というのは、「柔和な者は幸いです」に対応していると言います。ですから、心の清い者に戻りますと、その人は罪に対する悲しみを深くしているので、自分の心が汚れてしまうことをとても嫌がります。

2A 心の清さ

1B 外側の行為

イエス様は、「心の貧しい者は幸いです」の時と同じように、「心のきよい者」と、心を強調しています。パリサイ派や律法学者が、外側の行いを重視していたのに対して、イエス様は心にあることが外に出て来るとして戒めておられました。「23:27-28 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいだ。同じように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいだ。」外側の行いによって、むしろ内なる汚れがあることを覆い隠し、放置してしまうことさえあります。箴言にも、「4:23 何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。」とあります。そしてパウロは、福音について説明している時に、人を裁く人は自分自身を裁いていると言って、自分を欺くことの現実を伝え、それからこう言いました。「ロマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」ですから、私たちは単に自分が外側で行っていることが正しいからといって、それで安住しては決していけない、ということです。

私たちは、とかく自分の表向きの行いによって、自分のしていることを正当化してしまいがちです。イスラエルの民は悔い改める時に衣を裂いてそれを表現していましたが、主は「心を裂きなさい」と言われました。「ヨエ 2:12-13 「しかし、今でも——【主】のことば——心のすべてをもって、断食と涙と嘆きをもって、わたしのもとに帰れ。」衣ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神、【主】に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深い。怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直してください。」

2B 心の邪悪さ

心というのは、邪悪であります。どんなに預言者たちが立ち返るように呼びかけても、それで悪を行うユダの民に対して、エレミヤはこう預言しました。「人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒しがたい。だれが、それを知り尽くすることができるだろうか。わたし、主が心を探り、心の奥を試し、それぞれの生き方により、行いの実にしたがって報いる。(17:9-10)」心を取り扱うということ

は、実は自分自身ではどうにもできないということを前提にしています。他人の心の内だけでなく、自分でさえ、知り尽くすことさえできません。直しようもないともまて言われます。ですから、心の問題というのは、「わたし、主が心を探」と言われる領域なのです。主が関わることによって、その奥にあるものが明らかにされ、それで主にあって新たにされることのできる分野です。主との交わりの中で、明らかにされ、正され、癒され、新たにされる部分なのです。

イエス様も、心の邪悪さについてこう言われました。「マタ 15:18-19 しかし、口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしりは、心から出て来るからです。」ここでイエス様は、外から入って来るものについては、体の中を通して排泄物として出て行くけれども、本当の汚れは心の中から出て来るものだとおられます。これなど、到底、自分ではどうしようもできないものです。ですから、自分で何とかしようと思って、心を入れ替えようとしても、環境を変えても、どんなことをしても無理なのです。それは、アダムが罪を犯した時から人々に引き継がれている堕落した性質の為であり、ただ、キリストにある神の恵みによることしか、変えられないものです。

3A 心の清さの幸い

1B 新しい契約の働き

それでイエス様は、最後の晩餐の時に、「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約の血です。(ルカ 22:20)」と言われました。イエス様が流された血によって、私たちの罪が心から、その良心から清められ、そして御霊が注がれて心が一新されます。その働きの中に自分の身をゆだねる時に、私たちは心の清さを保つことができます。ですから、イエス様は、群衆に対してこう言われました。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。(ヨハネ 6:29)」イエス様を信じるということ、これは知的に同意するということではなく、どんなことがあってもイエス様を仰ぎ見て、この方に信頼するということです。イエス様から聞いたことを、そのまま素直に聞いて従おうとする心と言ってよいでしょう。御霊がその時に働いてくださいます。心を新たにしてくださり、主にお従いする力を与えてくださいます。

2B 「清め」

1C 二心からの清め

では、どういうところからの清めであるのでしょうか？一つは、「二心からの清め」と言ったらよいでしょう。私たちは先日の合同修養会で、第二部にて、神を私たちが愛することを学びました。その時に、新しい心について、それから「ひたむきな心について」学びました。新しい心については、今はなしましたが、ひたむきな心というのは、英語で undivided heart です。つまり、「分かれていない心」ということです。ある時には、主を愛すると言いながら、他の時には全く世と変わらないことを行っている時、その心は二つに分かれています。それを二心と呼びます。ダビデが詩篇 86 篇 11 節で、次のように主に祈りました。「主よ あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理の

うちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。」ここが最も難しい部分です。御名を恐れるというのは、どんな時でも主がおられることを認めることです。けれども、私たちの心は主がおられるところと、そうでないところを実質、分けてしまいます。この時間、この場所では主をあがめるが、そうでないところでは自分自身を求める。そういった弱さを持っています。けれども、主はすべてを捧げて、実に御子ご自身さえも捧げて、私たちを愛してくださいました。

神は、心を一つにしてご自身に応答してほしいと願われています。二心を忌み嫌われます。ヤコブは手紙でこう書きました。「ヤコブ 4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。」

2C 汚れからの清め

そして心の清めとは、「汚れのない」という意味でもあります。教会の中で、苦みをもって生きるならば神を見ることは出来ないとヘブル書の著者が言いました。「ヘブル 12:14-15 すべての人との平和を追い求め、また、聖さを追い求めなさい。聖さがなければ、だれも主を見ることができません。だれも神の恵みから落ちないように、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。」苦い根が人々を汚すとあります。そして、将来の天のエルサレムにおいて、汚れがある者はそこに入れないことが書かれています。「黙示 21:27 しかし、すべての汚れたもの、また忌まわしいことや偽りを行う者は、決して都に入れぬ。入ることができるのは、子羊のいのちの書に記されている者たちだけである。」そして 22 章 14-15 節です。「自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。犬ども、魔術を行う者、淫らなことを行う者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は、外にとどめられる。」

3C イエスに似た者

そして、清いとは、イエス様ご自身のようになることに他なりません。「I ペテ 2:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。」とあります。イエス様を最も大切な方としてあがめ、愛し、従っていくことこそが心の清さを表しています。つまり、私たちが第二部で学んだこと、律法の代表的な第一の戒めを守ることです。「マタイ 22:37 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」これが、一つ心になっている姿であり、その時に神を見ることができるという約束です。

4A 神を見る

1B 神を見ることのない人間

その約束に注目してみましょう、「**その人たちは神を見るからです。**」とあります。神を見るとはどういうことでしょうか？これはもちろん、肉眼で神を見るという事ではありません。モーセでさえ、主の御顔を見ることは許されることではありませんでした。モーセが神に、「どうか、あなたの栄光を

私に見せてください。(出エジプト 33:18)」とお願いしました。けれども主は、「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。(20 節)」とされました。そしてモーセを、岩の裂け目に入れて、ご自分の顔を見せなくて、後ろ姿だけをお見せになりました。そしてヨハネも、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。(1:18)」と語っています。

2B 神を知る恵みにあずかった信者たち

けれども、私たちキリストを信じる者たちは幸せであると、かつてイエス様が語られました。肉眼では見ることは出来なくとも、信仰によってその霊的な本質は見ることはできます。目で見えないものを見るようにして生きることが許されています。「マタイ 13:16 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。」今、イエス様を見ているから幸いだと言われている。私たちはイエス様ご自身でさえ、弟子たちのように肉眼で見えていませんが、それでも御霊によって、この方に触れることができます。その時に神を見ていると言って過言ではないでしょう。初めの文脈に戻りますと、私たちが憐れみを示している時に、その中でイエス様だけをあがめ、この方に仕えている時に、そこにはイエス様の姿が見えているはず。ご臨在があるはず。そこにおいて、神のお姿を見ていると言ってよいでしょう。

3B 将来の希望

けれども、私たちはさらに、イエス様が再び戻って来られて、私たちを引き上げられる時に、顔と顔を合わせてはっきりと見るようにされると約束されています。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見るようになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。(1コリント 13:12)」私たちはこの希望によって清められているのだと、ヨハネは第一の手紙で言いました。「Iヨハ 3:2-3 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」このようにして、私たちが信仰で今、見ているキリストを、顔と顔を合わせるようにして見る希望があり、その希望を抱いている者は、この方が清いように、自分を清くするのです。ですから、イエスが来られることを待ち望む希望はとても大切です。

そして天のエルサレムでは、神を見るという祝福でその幻が終わっているのです。「黙 22:3-4 神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。」この希望に向けて、私たちは絶えず上のものを求めます。下にあるもの、地に属するものは、あらゆる欲でありますから、肉体の行いを殺します。そして、主の御顔を見る時を待ち望みながら、聖霊に満たされて、自分の心の清さを一心に保つのです。